

〈論文〉

要略・日本近代小説の《貝合せ》
——その傾向、あるいは偏向——

大森 郁之助

慰といへど貞女の貝あはせ（あづまからげ）
貝合いづれ女の遊び也（柳多留六十三）

I

たまたま暇を得て顧みると、九十年代の大半を、由縁あって少女小説乃至令女小説、就中その一成分としての女性の同性愛モティフの考察に集注して来た。その結果は『札幌大学女子短期大学部紀要』『国語と国文学』及び本誌に逐次発表して来たが、その過半を収めた旧著『考証少女伝説——小説の中の愛し合う乙女た

ち——』（平6・6有朋堂刊、日本図書館協会選定（大専般））は国会図書館の分類では『日本小説——歴史——明治以後』と『同性愛』との二股掛けになっていて、後者のスタンスについても準・専門程度の自覚は持つべきなようにも思われ、あらためて己が行跡（業績の誤植ではない）の正当化と日本近代文学史の一小盲点補填の一助との為に、女性間思慕の文学史的位置（及び、意味）づけに就いての私見を略述して置きたい。

文学史云々の前にまず語彙的に見ると、日本語では男色と云うも女色と云うも所詮男が求める対象の性の種別であった。「少

「年」という語には既に近世文芸に「男色の相手とする年少の男子」(日本国語大辞典)をさす用法が見えるのに、これと対応するような「少女」の用法は遂に生まれなかった模様で、男、抜、きの性愛の呼称は、隠語以外、通常の辞書にも載る語(英語の lesbianism, Sapphism はコンサイスにも載っている)としては定着していない。少なくとも語彙的言語的には、性愛とは男性に帰属し、男性にとつての分類以外は考えられないもの、とする考え方——とも謂い得ようか。

それが明治に入つて、三十六年の読売新聞連載小説「魔風恋風」(小杉天外)では看板に偽りのな掛け声だけに終つたもの(註1)の、やがて四十四年の大阪朝日連載「あきらめ」(田村俊子)によつて、命名は未だしくても具体的な女同士の思慕恋着のさまが小説の世界に現出したこと(註2)は、そう云いたければフェミニズムの一進展と謂つて置いても宜い(註3)。

しかしこれを男の側から云えば(「魔風……」にしろ「あきらめ」にしろ共に新聞小説で、それ自体の愛読者はかりに女性の方が優勢だったとしてもその情況を支えた新聞購読者は圧倒的に男性だった筈だ)、それは女を、直接交渉の相手として以外に全く傍観者的な鑑賞の対象とするに到つた、という、感受範疇の拡大である。読者の分身(としての登場人物)が行為してくれるポルノ

グラフィーの準当事者性はいうまでもないが、ストリップ・ティーズ——時代風俗に合わせて云えば或る種の活人画(例えば「吾輩は猫である」六の、俳人高浜虚子が通りかかるまでの場面のよう)や『明星』第八号(明33)に物議を醸さしめた婦人裸体画などは今その場に男性(観客読者がおのれを重ね合わせるべき)が居合わさないだけでも云えば云えるのに対して、こちら女子同性関係は直接の対者・交渉者の座が既にもう一人の女性に占められてしまつており、男性読者にとつては自らを窺入対座せしむべき空想の余地が全く閉ざされている。鑑賞の第三者性、純・美的享受性の度合いは、考えられる極限にまで高められているとも謂えよう。

ここまで何となくフィジカルな意味で述べて来たけれども、メタフィジカルな面でもほぼ同様である。

そしてそもそも、肉体的欲望の充足でなくて美の見地からすれば、男にとつて(女性にとつてはともかく、少なくとも男にとつては)同性より間違いなく魅力的な女性(註4)二人の組み合わせの方が、魅力的な女性と魅力的ならぬ男性との組み合わせよりも確実に魅力的な筈で(フィジカル・メタフィジカル、共に。うっかり言い遅れたが話の都合上、ペダラストという少数派は今除外)、これまでこういう組み合わせを思いつかなかつた迂愚を嘆じたい位であ

ろう。^(註4)

異性に関わる快楽の、直接的・本源的なものから間接的（ときえ云えないかも知れない程、間接的）・派生的なものへの拡大とも謂えて、一般に後者が多様・豊富な程、その生活様式その社会を文明が進んだ段階とするなら、レズビアニズム小説の成立が示唆し或いはもたらしたものは女性の地位乃至自覚の向上だけではなく（本稿筆者の本音としてはそれらであるかどうかはともかく）、明治の男性主導型文明がそれとして、成熟の一段階を進めたことの徴証と做して、さしたる過誤はなさそうに思える。

軽妙奔放な《少女》論を次々と物してきた本田和子氏は、「明治末期の海老茶式部たち、風俗画や新聞小説に動員された彼女らのあのスタイルは、リボンも髪も、そして袂も袴の裾も、いずれもが風に翻るべく運命づけられていた」——それがどうした？——という警抜な着眼から^(註5)、この新しいスタイルの「『自由さ』と『活潑さ』が、ひとときの挑発力をもって人々の耳目を刺戟し」、「魔風恋風」や「青春」（明38、小栗風葉）の女主人公を以て「外に放たれ」「抑止力を失」つて「玩物視に値いする」ところの「欲情する肢体」に描くべく、「暗黙の了解を広く人々の間に浸透させたのであった」と宣した（『女学生の系譜』、平2・7青土社）。

その人々の裔の男系の男子としては些か残念ながら、そのこと

自体については正面から押し返すべき根拠も論理も持ち合わせないが、しかし、明治の女学生の開化の終盤に於て男性（を主体とする、世間）から向けられた好奇の（には違いない）視線の中には、そのようにヴァルガーではない、より文明的なものも含まれていた（前述。「魔風……」「青春」もだが、かの「あきらめ」も又紛れもない女学生物であり、一方、「青春」にも女性間思慕に、近似した趣向はある）ことを言い添えないと、文明論としても女性学としても、正鵠を逸することになろうと思われる。

II

さて、しかしながら、近世以前の閉却・排除の風を明治末に脱したのちの我が国におけるレズビアニズムの小説化は、程度と意味とは多様ながら、いずれにしろそのテーマ・モチーフへの蔑視乃至貶意を、免れ切ることとは稀だった（その稀な例は概ね少女小説だが、その間の消息は旧稿「川端康成・《少女伝説》の終焉——『歌劇学校』以後私観——」（本誌第三号、平9・3）II節に譲る）。成人向け小説での女子同性愛モチーフに対するヘフリーク^(註6)視を分類すると、およそ、次のようになろう。

①当事者の肉体的または精神的劣弱（通常のヘテロセクシュア

リテイに耐えないような?) から、同性に向かう、という設定。

②ヘテロを忌諱させるような体験や見聞から、という設定。

③ヘテロに於ての相手選ばず式の淫乱が、遂に相手の性別をさえ選ばなくなつて(?)、たまたま出会った同性が条件に合致したため、という(そう解する他ない)設定。

要するに何らかの意味でまっとうでない女性に生ずる傾向、という認識が大勢——の底に在る——と思われるのだが、それぞれについて簡略に一二の典型を示すと、①は例えば池田みち子「肉体の履歴」(昭24)で、「容貌に恵まれなかった」ため「自身の女の夢」を愛くるしい下級生「の上に描い」て執着し、その後、一度は結婚したものの「十二分に満足を与えあうことに慣らされた同性愛(者?)」の肉体は、良人では満足できなくなつてい」て、離婚、書道家として自立し、次々と同性を求めらる。

〈精神的〉劣弱とは、例えば、自身実際に同性と生涯を共にしたことが知られている吉屋信子の、かなり自己の若年時の体験事実を重ね合わせていると見られる「屋根裏の二処女」(大9)での二人のような場合である。「わづかに田舎の私立の女学校を出ただけで、そして十七、八から、ただ何も知らずに人の世に興味を失つて、萎んだ姿をして、うすぼんやりとの、その、生きてゆく若い

娘」である女主人公は、「何から何まで(略)自分のすることがわからなかつた」「自分の生活がわからなかつた、自分に与えられてある人生がわからなかつた」と繰り返されるのだが、そうはいつても、女学校を卒業すると更に進学して中等教員の資格を取つて母校に戻つて来るよう、学校から仕向けられて上京しているのだから、少なくとも女学校時代には最も単純普通の意味での劣弱者ではなかつた。劣弱性(が、あつたとしても)を蔽い隠す術も心得、装う偽り(?)に耐える通常の凶太さ(?)も具えていた筈である。作品結尾で似たような嘆きを告白してくれ意気投合する、相手の「秋津さん」は、より以上に、少なくとも外面は現在もYW(C?) Aの寮での優等生である。そうした二人の〈人間の不器用者〉的自覚は、たとえば太宰治「人間失格」での〈人間の《空腹》感というものが判らない〉といったような、甚だしく現実味を欠きはするがそれなりに強烈確固とした、他人と隔てる核も示されていらない。フィクションならフィクションなりに〈不器用者〉たるに到つた道筋を、読者は納得しえないのではないか。

そしてその、共に人生に「なんの目当てもない——その目的なしの寂しい弱い私たち」であるゆえに「いつしよに生きて行きませう」という共生志向の理由づけは、述べられた限りでは相手の性別を指定限定する要因を含んではいず、性格的劣弱者(自分な

りの、人生理解は、持っているならいいが、ただ（判らない）で終わっている（やはり劣弱だろう）だから同性にという飛躍した論理としか解せない。或いは、げんに女性である二人にすべてを（判らなく）させている源は男性中心社会であって、従って共感し得・共生すべき相手は女性に限られるということかも知れないが、それなら、その寂しかるべき全女性の中で二人だけがそうと自覚した原因は、と元に戻って来ると、はなはだ云い辛い、有名な一つの逸話——或るパーティの席上、女流としてはただ一人招かれていた作者吉屋信子がへいま大地震が起こって此処にいる人達だけが生き残ったら、皆が自分に求婚するだろうとスピーチして喝采を博した、という（吉武輝子氏『女人吉屋信子』、昭57・12文芸春秋）、その風貌（への意識）が、もしも自伝小説だったら主人公の心因に書き込まれる筈だったろうか、とも考えてしまう。

この臆測を伸ばせば前引池田みち子作品とほぼ同種になつてしまふかとも思われるが、いま現前の作品本文を尊重する限り、原因・経緯共にもう一つもどかしいものの、つまりはそれだけ把え難い、奥深く陰微な心の患い（ゆえの指向）——ということなのだろう、と甚だ妥協的な一項を立てて置く。

と云いつつも猶、不徹底で気色が悪いのだが、じつは似たようであり、先年選集（『横田文子人と作品』、平5・

8 信濃毎日新聞社）も纏められた第三回芥川賞（昭11上半期）候補作家の「落日の饗宴」（昭11）とその関連作では、その愛はゆえも無く（少なくとも示されず）、ただ鬱屈混沌とした近時平生の心境の一発現としか解し得ないし、かつ、主人公の全人間像の中に於ける位置（意味）づけも又その程度にとどまっているとせざるを得ない。このテーマ・モチーフは女流作家にとってより一層、と云うのはもう少し博搜した上でないと軽率だが、少なくとも女流作家にとってさえも、病名も原因も特定し難い、不健康な不健康として捉えられる傾向があるようなのである。

さて、フリーク視の第二のタイプは、①でも（窺えるか？）と考えた（男性忌避）が、より具体的な行為（自・他の）に基づいているもので、本人のレイプ体験などでもよさそうだがそれは時に反動的な執着ともなる（と、いわれる）ためか、むしろ、親の異性関係を嫌悪して自分は同性に向かう、というパターンが目立つようである。

一口に親と云ったが父親についての見聞を因とする方が目につくのは、母親の異性関係への嫌悪であればまず、差し当たって母親という同性が嫌悪され、その相手の異性や、異性関係への嫌悪に先じて同性——との関係——が却けられてしまう（筈）、といった事情（理屈をつければ）でもあろうか。山口年子の「雨と霧のエ

ロテイカ」(昭44)の女子高生は作中の早い段階で「考え方のゆがみ」「暗さ」を措定されているが、その原因だけでなく、それらを年上の同性からのいたわりに応える方向へと形作って行った最根本因も又、開巻二ページ目に置かれた、母親の入院不在中に父親の情事を目撃したと解するのが、作品構成の上からも妥当と思われる。但し、少女の相手の結婚適齢期の女性の方もまた、親代りの伯父夫婦(実の両親は彼女の幼時に鉄道事故死)の仲が冷えていて伯父は公然と妾宅を構えている、とか、その「善意に満ちた記憶が多い」育ての親の伯父に、学齢前に一度だけ、膝の上で戯れていて指でまさぐられたことがある、とかは、直接、少女への愛に繋げては書かれていないように思える(少女への愛着と対照され対立させられているのは縁談の相手の青年という特定個人への、現前の心・身両面への違和感だけである)。それを強いて、どこかいびつな環境という条件作りの役割を荷っている筈、などと考えると、こちらがフリーク視に関するミイラ取りのミイラになり兼ねまい。

タイプ③は、谷崎潤一郎の「正」(昭33)に代表され、田村俊子「春の晩」(大3) 永井荷風「問はずがたり」(昭21) 瀬戸内晴美「女徳」(昭37) 38)等の類例を持つ、異性愛と同性愛とを殆ど抵抗なく出入往来しうる(比重は両者同等と限らないが)アン

コンシャス(?)・バイセクシュアリティのケースである。有名な「正」を例に出したから、どのように融通無碍かは省略する。

以上は、女子同性愛が特殊事情の下に(特殊≡異常な人物に)生ずる、というセオリーの内訣だが、それとは別に、何故(どんな特殊事情? の下に)生じたかは判らない(少なくとも説明はされない)まま、とにかく実現している結果≡愛の様相はフリークの、という設定もある。例えば、現在最も注目されている女流の一人であるらしい松浦理英子の「ナチュラル・ウーマン」連作(昭62刊)ではフェティシズムやアナル愛がふんだんに取り入れられているが、そうした、少なくとも標準的的平均的とはいえない行為形態をとる原因としての、何らかの≡非・標準、非・平均的事情といったものは、心理的・肉体的・環境的等々、どの面からも、納得させるまでの説明なり紹介なりがなされているとは云い難い。強いていえば、そういう行為形態を求め、心理、つまり行為に隣接する時間的に直前の心理が描かれているだけで、その心理の出自・所以は閉ざされている。となると、標準的平均的(性)体験・(性)心理しか持たない大多数の読者は、本文中でとくに異常な性と規定はされていない同性間という枠組を以て、いわば中間的原因に擬し、この(同性間、という)異常性ゆえの異常行為(詳しく云えば「性の異常をもたらすような何かがあつ

たわけだから行為の異常も自然」、或いは「性が異常なのだから異常な行為が適わしい」、と推察納得して（しまつて）蹠いて行くのが、——作者にとって本意であろうとあるまいと、自然の成り行きとなるのではないか。

前出、完型レズビアン小説の第一号「あきらめ」では主人公の姉に「真逆女が女に惚れやう道理がない」と無理解なことを言わせていたのに、現象としての異常行為の因に同性間であることが擬されるならば、それは取りも直さず同性間関係という事態の、概念（たとえ誤りだらけだろうと）の普及、一種の公認を、前提とする。そうではあるが、それは要するに異常な性としての概念の普及、公認ということだから、効果からいえば松浦作品は、古典的に愛の成り立ちから説き進めるタイプ①③よりも遙かに有力な、フリーク観浸透・定着の別働隊とすべきだろう（ちなみに右「あきらめ」では初出時に少女の病的な恋慕を「脳神経衰弱（略）の故だと医師が云ふ」とあつたのを、刊本では除いている。後年の頑固なフリーク視は、小説に登場した頭初からとは云えないようである。ついでを以て）。

こうした、とにもかくにもフリークなのだ（事情など不問）という固定観念化あるいは固定観念の前提化は、第十八・十九回芥川賞（昭18下期、19上期）候補作家だった若杉慧の「エデンの海」

（昭21〜22）に、極めて判り易い形で表れている。「戦後に書かれた作品で、これほど健康で、新鮮で、のびのびとした明るい楽しい作品は、めずらしい」という褒め方（高山毅氏、角川文庫版解説）は、女主人公の女学生の、「率直さということについては」級友の「誰も及ばない」男性教師への感情表現に関する限りは、肯定できる。しかしその同じ女学生の、年長の同性との「S的噂」については、右の男性教師も含めて「不可解」と断じたきり（断ずる経緯、断じた後の対応、共に欠落）で、ただ、相手の「三十女」を抽象的・独断的に「深くも傷つけられた人間の姿」「男とも女ともつかない、おそらく人間でもないようなものの姿」と嘆じ（たしかに異様な男装姿だが、それだけの意味ではないだろう）、そして全十三章中の五章までで右の「噂」も相手の女性も作中からふつりと消える。あとは、その後遺症（その女性のはともかく、女主人公の）を気づかわれることもない（従って、思い出されることなど全くない）。同じ女学生、同じ男性教師の、異性愛に関して（女学生の叙写の量、男性教師の行きとどいた配慮）と対比すると滑稽感をおぼえる程の、極端な、一種不可触扱い（この場合FBIよりはインド賤民の方だが、多少前者の気分もある）なのである。

そしてこの不可触感の極限の、ヴァリエーションの一態とも解

されるのが、大谷藤子の「風の声」(昭50)である。堅実な作風で記憶されるこの女流作家が美貌の後進矢田津世子に傾けた愛のほどは伝説化しているが、その死の二年前の標題作は、近藤富枝氏によれば「四十数年昔に、藤子が同性の友人(矢田とは別の)に裏切られたことを題材にし」たものという(『相聞』、昭57・5中央公論社)。しかしその(裏切り)の内容は、同居していた同性が、藤子を去り、男に走った事実(同前)を、同居の同性が作者への求婚者を奪って故郷へ行く話に、作り替えられている。外形は似たようなものだが、去った同性への未練か、去った同性が奪って行った異性への、か、力点が異なる。その結果として、作中の「私」の痛恨はもうひとつ不可解」になっている、と近藤氏は云う。

モデル事実についての近藤説を大前提とした上でのことだが、矢田やモデルの友人以外にも中年過ぎまで同性との交情を伝えられるこの作者にして、なおかつ、作品としては異性との間に改装しなければならなかった(改装を得策と考えた、くらいでもいいが)わけであろう。とすれば、フリークとして描く、までも行かず、そのままには描けないようなフリーク、と観ぜられる場合(観ずる作者)さえもあった、ということだろうか。

以上、些か雑然とした諸相の展示になってしまったようにも思う、この事柄の、或る程度のモデル化にもなるうかと考えられる

事例を挙げてこの節のまとめとしたい。

福永武彦は早い時期に、自ら体験事実性を主張する長篇小説「草の花」(昭29)で旧制高校の上級生下級生(当然、男性)間の同性愛を描いて、後年の主人公の異性愛をそれに導かれた(それが発達成熟した、ではない)ものとし、応召離京する際にも彼女ではなく彼の俤に呼びかけしめたが、最後最大の力篇「死の島」(昭46)で、怯懦な男性を諦めた二人の女性をして同性心中に赴かしめた。

女同士のベッドシーンは男性とよりも遥かに情緒的かつ濃厚に描かれているが、注目すべきは前出の男性が女二人の仲を「何等かの実りに達」する筈の「静かな充実した魂の状態」で、彼本人を「受け入れる余地は、もう決して残っていない」ものと極め込んでいるのに、当の二人はぎりぎりの段階まで「清潔」な相手に「自らを恥じて」求められずにいた。異性愛を願った後の癒しとしての位置(価値づけ(池田みち子作品の例とは意味が違う。念の為に)もさる事乍ら、完全な傍観者としての男性からの肯定(むしろ賛美——劣等感?)と対照して固定観念的でさえある、当事者の卑下・罪悪感が、このプロット(前述)、この作者(同)に於てなお、説明抜きに済まされている、ということである。

III

近世以前の閑却無視からの転換は、これも又、文学に於ける欧米風追随模倣の一端だった——のか、どうかは審らかにしないから、ここで欧米の風と見比べるのは見当違いかも知れない。しかし、このモティフのことにしなければ日本近代文学が大むね何事につけても欧米の風を、目標と云ってしまうと些か粗雑でも、最も気になる参考として来たことは争えまいから、前述、このモティフの扱いが、もしも彼地の風と明らかに異なっている——明治以来異なり続けているならば、全くの無意識、偶然とは考え難く、かなり根深く従って意味深い筈の特異性とせねばなるまい。

ところで、欧米文学に於ては云々という概括は、当然、日本文学では云々という概括の少なくとも数倍（これは対象国の数からの単純計算）、予備知識の差を考慮すれば十数倍あるいは数十倍の論証を要するか、さもなければ圧縮された筆者の文言の裏に蔵されている筈の知識見識に絶対の信頼を寄せ（得）るかの、いずれかとなる。いま、そのどちらも望めない以上、正攻法は避けて、多くの遺漏はあろうとも述べている限りには誤りはないフラグメンタリズムを心がけ、間道を拾い歩きすることにする。

間道の入口は、例えば、Le Fanuの怪奇小説“Carmilla”（邦訳

題名「吸血鬼カーミラ」）や Grant Allen “Wolverden Tower”（「ウルヴァーデン塔」）での女吸血鬼や死霊相手の（勿論それと知らずにだが）レズビアン・ラヴが、相手が正体が知れて滅ぼされ又は退散した後の結末部に於てもなお、そうした者——との事自体はあらためて悔やまれも忌まれもしない、という、日本のレズビアン小説の大勢から見ればまさに驚くべき（驚かなければいけない）事実である。

前者に於ては、吸血鬼退治の定法通り胸に杭を打ち込まれての凄まじい最期を伝え聞かされたヒロイン（人間の少女の方）が、遙か後年に到つてなお、かつての相手を「ものうげな美しい少女（の姿）で思いだ」すこともあり、「客間の入口にふつとカーミラの軽い足音が聞こえたような気がして、夢のような思い出からはっと驚くことも」ある（平井呈一氏訳による）。生前も、厭わしかったのはカーミラのお愛撫執着の執拗がしばしば過度に及んだ時・そのことのみであったが、そんな彼女と思慕し合ったという事自体は総体は、じつは人外の同性との思慕だったと判つてなおかつ、厭われもせず、恥じられもしない。後者、「ウルヴァーデン塔」でも、正体を聞かされたヒロインの結尾の発語は、自分が生け贄となる誓約を破つたために倒壊した古塔の下敷きに、死霊の美少女がなりはしなかつたらうかという気遣いであった。妖魅に

惑わされた当人だけでなく、例えばSeabury Quinn「La Claire de Lune」（「月の光」）ではオカルト探偵役までが、相手がじつは人間の生気を吸い取って自分の生命を支えている女怪だったことを、少女には知らせず、「永久に美しい思い出にひた」らせ「憧れを持ちつづけ」させる「ほうがずっといい」（村社伸氏訳）と主張する。

これらは勿論かたちとしては登場人物がどう感じているかであり、作者の意見表明とは区別されねばならない。しかし、そういう感じ方をする登場人物自体はどのような人物として描かれているかといえば、最後のオカルト探偵は当然、一面では作中最も認識・判断の誤りが少ない人物だし、他面、作者の分身性が最も高い人物でもある。ヒロイン達の設定について云えば、全篇一人称の「カーミラ」では語り手たるヒロインの実像は客観化を欠くといえようが、通常の客観小説形式の「ウルヴァーデン塔」のヒロインは「豊かな黒髪、清らかな美貌」で「眼には、とくに現身の人とは思えぬような深い光が宿」り、当世好みに改修された古塔の現況を批判する「二十歳の娘の率直さと、古物研究家の娘として培った玄人の見識」（南条竹則氏訳）を持つ。誑かされ役の白痴的美女とは程遠いのである。「月の光」の少女（人間の方）は純情可憐のおぼこタイプだが蒙昧無知の方向には行かず、通俗美男美女小説（ここでは美男の方は出て来ないが）のヒロインとしては

ごく普通のキャラクターといった設定である。

いま何気なく通俗……小説と云ってしまった、この点はとくに念を押し置きたいのだが、こうした通俗的（自称知識人からの貶意を含みぬ、文字通り popular の意）ヒロイン像を好み、受け入れた通俗（同前）読者が——つまり、偏奇を意気がり気取る好事家や性格的に偏奇な（場合が多い）研究者といった特殊少数者でなく、尋常普通の（これもどちらかといえば好意的用法）人々が、従って理屈に俟たずに自然に、右のような全く無批判な（ヒロインが、そして作者が）レズビアン・ラブを好み受け入れた（——わけであろう）という点である。ついでに云えば、「カーミラ」については

すべてがロウラ（ヒロインの名）の不安な視線を通じて語られて以上、吸血鬼カーミラはむしろ被誘惑者ロウラの淫蕩な夢想が生んだ誘惑者（註7）と考えてしかるべきであろう。

（種村季弘氏「吸血鬼小説考」、昭44・11新人物往来社刊『真紅の法悦』）

とも考え得、その場合は十九世紀の通俗読者にとって理解とか受容とかいう以上の、より主体的積極的な共感を生む要因、もっとはつきり云えば彼女達自身の潜在願望の存在さえ示唆されるわけだろうか。但し云うまでもあるまいが、これらの例は近代欧米の

通俗読者が妖魔を嗜好した、あるいは妖魔とであれば一層、(レズビアン・ラブを)嗜好した、ということではなからう。妖魔という条件でも抑制されぬ程の(L・ラブへの)嗜好、と、穏やかに(かつ、本稿にとつても都合よく)解して置く。

以上、話を端折るために、こうした場合でさえも、という、演繹作用も期待できそうな事例を選んだのだが(決して、稿者の好み^{のせい}——だけ——ではない)、正常な作品の事例も念の為一つだけ挙げると、Christa Winsloeの「ベストセラー小説」(中井正文氏、角川文庫版あとがき)“Mädchen in Uniform”(制服の処女)の結末などは、どうだろうか。プロシヤ陸軍の将校だった父親の退役、官舎からの引越し、母の死、知り合った少年の、母親への思慕(亡き母の代わりとして?)を少年へのものと誤解されて規律の厳しい修道院付属女学校に入寮させられる、という経緯にも、取り立てて〈異常〉は謂えまいが(前節の日本の場合参照)、以前にも上級生(同性の)に惹かれたことのあるヒロイン(但し、入寮当初は友達の「女の先生を」愛するという話が「どうしても理解できなかった、ともある)は、母親の心づかいを得られない彼女の貧しい下着に同情してくれた若い女教師に思い焦がれるようになり、ついに修道院の規律からはみ出して、塔上から飛び降り自殺する。しかしその最後の場面では女生徒全員の熱い共感が

彼女(と女教師と)の支持へと奔っているので、あえて両度の映画化(一九三一年、五八年)のように一命を取りとめる脚色を施さなくとも、この愛は所属集団の(——読者の)承認は間違いなく獲得し、或る意味のハッピー・エンドとも云えるのではないか。

もう一度念を押して置くが、これは前出怪奇小説の例などに比べても一層〈好みの問題〉の稀薄なことが明らかなベストセラー小説での現象であり、さらに映画化によってより一層の量的及び質的ポピュラリティを証^(証せ)されている。

そして些か跳ぶと、そうした、欧米文学でのあり方に対応して(と、解してよからう)我が国での欧米文学受容にも——欧米文学受容には、自国文学に於て・対してとは一味違う扱いが見られるのではないか。例えば、十分にオーソライズされていると云えよう比較文学系統の著者・書物の中に、「薔薇の花のようにふくよかなドイツ系の美少女に、はげしくひそかな同性愛的な思いを寄せた経験が話の中心になる、ヴァレリー・ラルボーの小品「ローズ・ルールダン」を「傑作」とへ絶賛し、中でもヒロインが愛を自覚するくだりや、後年、この「十二歳の少女の物狂おしい情熱の冒険を、こまやかになつかしく回想したあと」のヒロインの殆ど手放しの、思い出への没入を、「とくに私の好きな個所」で「これらの個所にくると、私はいつも自分がかかる興奮し、一種の恍

惚感が湧いてくるのを覚え」る、とした論評を見る(芳賀徹氏「蕪村とラルボー」、昭56・7美術公論社刊『みだれ髪(註9)の系譜』)。

そういえば「制服の処女」も、第一回の映画化作品は昭和八年度の『キネマ旬報』洋画ベストテンの首位を占めた(後年、この絶賛は少々軽率だったということに落ち着いたようだが)。主演女優の魅力(も、当時評判だったらしい)とか舞台のエキゾチズムとかの要因もあろうが、テーマ自体が忌諱されればここまで行くわけがない。

つまり、そのテーマ・モチーフが欧米文学の作品中に(広く、外国文学の作品中に?)存する場合はとくに目くじら立てもせず異端視もしないが、自国文学の中で描かれる(自国の文化・社会の中に在らしめられる)のは看過し難い、というのが我が国の実情だったかと思われるのである。

そこでいったい、日本文学での(文学だけのことではないが、さしあたり)扱いの特異性——(1)男性間に比しての、(2)欧米文学に比しての——は何ゆえだろうか、と考えてみても、感情的感覚的な不快感和(?)ではなくて現実に、具体的に、いわば自然科学的な意味で、市民社会などと気取ることはないのでおよそ人間社会の最大前提(種属の維持)に対して害となる、その成り方は、

洋の東西を問わず男性間の方が決定的であるのは争いようがない。その点についての日本だけの特殊事情など有りようがない。

従って、男性間についての弁護は、(種属維持が果たして人間にとって最大最高の目的か?)という議論をなし得る仲間内を一步出たら、主張しにくく、聞き流されたなら僥倖とすべきかも知れない。しかし女性間の場合、精々、家父長制や男性優位社会の遺習的気分にとつて目障りと云つてみても、それらは他の諸事情からの稀薄・形骸化、骨董化がとつくに進んでいることは、日々、目にする通りである。

とすれば、かつては知らず少なくとも平成の世の研究者としては公衆道徳の見地に対してさえも憚りは少なく、この、作品の数量は多くなくても時に上質の美も汲める分野に向かつて、手を拱いていることはないと思う(——思った)のである。

註1 この間の事情については『考証少女伝説』第六章(初出『札幌大学女子短期大学部紀要』二十二号、『魔風恋風』・幻の《義姉妹》考)に詳述した。

2 前掲書第三章(初出『札幌大学女子短期大学部紀要』十九号、『あきらめ』のもう一つの顔)及び第六章に詳述。

なお念の為、近世以前の文学作品化についての先行文献での言及を示すと、小峰茂之・南孝夫氏『同性愛と同性心中の研究』(昭60・12小峰研

- 究所)は広く世界の男女双方にわたって述べながら日本の女性間については生活実態として「古くから(略)行われていた」とするのみに止まり文献は挙げず、福永妙子氏『レズビアン』(昭57・3大陸書房)は西洋史では紀元前七世紀のサッフォールまで溯りながら日本文学は谷崎の「出」止まり、『別冊宝島』第六十四冊(平2・3JICC出版局)でも日本文学は「あきらめ」どまり。この分野の書物では僅かに奈良林祥氏『レズビアン・ラブ』(昭42・1コダマプレス)が古川柳一句を例示する程度である。では国文学サイドでは、というと、こちらはそうした項目自体かつて承認されていないもののように、オーソドックスな文学史レビューで男性間のそれと並び得ないことは断言してよからう。
- 3 フェミニズムの立場からのアプローチを誤りとはしないが、その意義のみに矮小化した言説と同類視されることは好まない。
- 4 石坂洋次郎「若い人」の一節に「男が無ければ熟せないやうな不具な女は、箒で掃かれてしまふがいい」という青年教師の感想(可愛がつていた女生徒に妊娠の噂が立った時)がある。これはべつに同性によって熟せという意味ではないが、文学作品に於ける(——少なくとも)レズビアニズムへの消極的(同前)支持心理として(少なくとも男性の側からの)、援用はできようか。
- 5 もっとも、小説論でなくて日常生活での風儀の問題としては当時(明治末)既に
海老茶袴は礼儀作法のみならず、年頃の女にはいろ／＼よくない訳があると論ずるものもあつた。(略)今日(大正末)女子の洋服は(略)女子が羞恥の心を失はしむるものだといふ説と相似てゐた(永井荷風「ちづらし髪」)とも伝えるから、本田氏の着眼は実生活での思惑を文学の次元に変換させたもの、とても謂うべきだろうか。
- 6 現実に日本近代社会で同性への愛に赴いた女たちが概ねその愛以前にフリーク性を帯びていたか、いなかったかは、本稿の考察範囲を越える。本稿は文学作品、その中でも小説に於ける形象が如何にあつたかを述べているので、その埒外に言及する意図は(想到はしていても)ない。
- 7 吸血行為が生命の源の体液の摂取であるゆえ根本的に性行為と同質、とする欧米の吸血鬼研究での定説(であるらしい。日本では未確立の分野と思われるから比較総合は不能)からすれば、「カーミラ」での二件の連想結合はむしろ極めて自然でさえあるわけだろうが、それに思い合わせると、日本最初の本格的吸血鬼小説といわれる(谷川渥氏『鬼の変容』、『別冊幻想文学』7「ドラキュラ文学館」)ところの横溝正史「髑髏検校」(昭14)で、首魁の検校の侍女で同じく吸血死霊の「鈴虫」「松虫」二人が実の姉妹という設定にとどめられているのは、レズビアニズムの日本に於ける処遇(閑却)を象徴する観があるうか。もっとも、真正直に論ずれば「髑髏検校」が下敷きにしたヨーロッパ吸血鬼小説の二大古典の一方、ブラム・ストーカー「ドラキュラ」にもレズビアニズムは登場しない(ペダラスティモ)が、だからと云うなら、それならば藍本にない二女妖の登場はいつたい何の為だったのかというもの(本場からすれば)であろう。
- 8 こうした寛容の根本的理由は、男性に比べて女性の場合
既成秩序にとってより危険の度合が低いと判断されたことも十分にありうる。ヴィクトリア女王は、女性の同性愛がイギリス社会の基盤を脅かすことがない以上、これを罰する法律を發布する必要は全くないと断言していたではないか?
ちなみに、ほぼ同時代、
一八六〇年代の末、ビスマルクのプロシヤは新刑法を公布したが、成人

の男性同士の性行為は最高禁固五年の刑で罰せられることになっていった。女性はこの法律の対象外であった。

(ドミニック・フェルナンデス『ガニユメデスの誘拐』(岩崎力氏訳、平4・2ブロンズ新社版による))

——といった事情が、最も決り易い(これがすべてとは云わないが)。これは同性愛への抑圧(とくに男性に対してだが観念的には女性にも)が強まったとされる近代(——でも、なおかつ)の判断の例だが、より大らかだった時代に溯ると、例えば十六世紀フランスの宮廷人たちの間で、「本も芝居も歌も肉欲の喜びと苦悩を題材にし、タピストリーはあだつばい気晴らしの情景を描き、絵画は露骨に恋の技巧の手ほどきをする類のものだった」が、それらは「男女間の恋の戯れとはかぎらず」、ときには「何人もの美しいご婦人方」が一緒に水浴びをして、「互いに体を接触させ、愛撫しあい、手で触れあい、なであい、探りあい、絡みあう」様子が描かれもした。しかも、「隠遁者や世捨て人すら」興奮せずにはいられないほど肉感的に描かれていた。／宮廷のある有名な婦人は、「二人の女性が戯れている絵画に「見とれ」て、急にわれにかえったかと思うと恋人に言ったそうだ。「ここに長くいすぎましたわ。早く馬車にのってわたしの家にまいりましょう。こんなに興奮しては我慢できません。家にかえって興奮を静めなくては。焼けるようにほてってしまいましたもの」と。

(キャロリー・エリクソン『アン・プリンの生涯』(加藤弘和氏訳、平2・8芸立出版版による))

即ち、少なくとも文学作品としての賞玩よりも一段直接生活的な、枕絵乃至ポルノ小説的レヴエルの於ては、女子同性愛は通常の異性愛にほぼ匹敵する評価——同等の容認——を得ていたわけであろう。大衆向け

小説での如上の受け入れられ方はごく自然当然とも思える。

9 つまり本稿筆者としてはごく月並に日本社会の女性軽視の傾向の一端としてしか説明し得ないわけだが、この認識の粗さや理解のずれ(多分、あるのだろうかと思う)は、本稿言及の範囲にはその正誤に直接関わって来ないことも断つて置く。

【付記 本誌第三号所載の小稿「川端康成・《少女伝説》の終焉」(II節所引)で「近代小説における女性同士の性愛がともかく何らか・何程かのフリーク視を伴ないがちだった」ことを指摘しながら、紙数及び論述のバランスの関係から「詳しくは別稿に譲る」とした。本稿はそれを承けたものである。

平10・1・14稿】